

たより

『美紗の会』

ニュース

第54号

平成18年8月24日

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋子

この夏はブルーの背中……

西松 布 咏

今思えば二〇〇二年の秋に
ようやくの思いで完成した三
枚目のCD「儂」のさしたる
反響のないこと……このCD
の運命も儂いみたい……と
ぼつんと漏らしたつぶやきが
第四回ニューアンスの会のタイ
トルとなり「儂十九夜物語」
*各分野のクリエイター達が
紡ぎ出す19編の映像と音のコ
ラボレーション*として二〇
〇四年十月八日に目白クラブ
で夢の一夜となった。

あれから二年……再び
「儂」はDVDとしてよみが
えることになった。

一度完結したと思った物語
のページを又開くのは容易な
ことではなかったが「未来に
かたちを残そうよ」とプロ
ジェクトに参加してくれた男
達の熱いロマンが後押しして
くれることになった。

更にボリュームアップしよ
うと十数年前から自ら作曲し
演奏している北園克衛の前衛
詩「黒い肖像」「ブルー」を映
像化して加えることになった。

そのイメージを具象化しうる
表現者は誰？……の話になっ
た時、私は迷わず舞踏家の大
野慶人氏の姿を思い浮かべた。
数年前に両国・Xシアターで
拝見した「郡司正勝氏へのオ
マージュ」で白い布を纏った
氏が仁王のごとく凝視し、

ジャコメッティの彫像のよう
にまっすぐ地に立ち尽くした
姿が今でも鮮明に脳裏に焼き
ついてたからだ。

その思いを胸に七月の初め
に横浜に程近い上星川の山頂
に建つ「大野スタジオ」を訪
れ慶人氏のレッスンを見学さ
せていただいた。

慶人氏の父であり師でもあ
る一雄氏は世界中から「舞踏
の神様」と崇められており今
年一〇〇歳を迎えられる。
四年前に三味線を携えレク
チャーに参加した折のひとと
きを懐かしく思い出す。

車椅子から大好きなプレス
リーの曲にのせて固く握り占
めた拳を何度も力強く宙に放
つ姿を胸を熱くし拝見したこ
とを。

慶人氏は「舞踏とは日常の
中で命のかたちを自らがどう
捕らえ、時代との緊張関係の
中で命がけでどの様に立つて
ゆかか絶えず考えて行かな
ければ無意味である」と生き
ることの原点を優しく語りか
けてゆく。その姿はまるで白
い睡蓮の花びらを一枚一枚空
に放つように優美に宙を舞い

「天界と地界の間に『折りの
かたち』を創造してゆくこと
が大切」と伝える弟子達との
渾身の二時間は瞬く間に過ぎ
この場に居合わせた幸せを

思った。

その感激もさめやらぬ七月
二十六日に近代美術館・葉山
で開催中のジャコメッティ展
に行った。

梅雨の晴れ間に雲ひとつな
い青空が広がり、美術館の白
亜の壁との対比がひととき目
に眩しかった。

館内は平日というのに多く
の見学者で賑わっていたが、
シンプルな人物と色の絵画や
研ぎ澄まされた彫像の間には
透明な風が流れていた。そし
て海を映す窓が心地よい背景
になり、ジャコメッティとの
逢瀬はまさに北園の詩の一節
にある「白とブルーの風の中
にいてジャコメッティの青銅
の彫像のように」前に立つ
私は様々な想いの繰り返す波
となりいつしか青く染まって
いった。

アルベルト・ジャコメッテ
イは一九〇一年生まれ。見え
るものを見えないモデルに表し
たいと数少ないモデルと執拗
に対峙し、やがては見えない背
景にまでも奥深く迫りその人
生を貫いていった稀有な作家。

かたや北園克衛は一年違い
の一九〇二年生まれ。その詩
的生涯のすべてを一貫してオ
ブジェとしての詩の可能性を
信じ、詩の図学を完成しプラ
スチックポエムと呼ぶ写真集
を出した道心堅固の人。

私が「海のブルーを見てい
る人の細い背中もブルーであ
る」と繰り返して熱唱するの
はまっすぐ立った背中に
「孤独の憂愁の直線の」
男のロマンを見つけてゆきた

月心居へ「季の会」に通う

増田 忠 士



喧噪の「原宿ヒルズ」裏手
にある、静寂の「月心居」。中
に入れば、昭和レトロロカ大正
ロマンを偲ばせる空間。
天井、ぬり壁、床の間、掛
け軸、生け花、などなど、掛
啓がナビゲーターを務めるNH
Kの番組「美の壺」を見て
いれば、蘊蓄が語れそう。夕
夕方六時に開店し、夜九時
過ぎには閉店。月変わりメ
ニューでは、旬の野菜を使った
精進料理が味わえる店。
主人の棚橋俊夫氏は、滋賀
県大津にある曹洞宗「月心寺」
で三年間ごま豆腐作りの修行
を積み、NHKの連続ドラマ

「ほんまもん」主人公のモデ
ルとなった人である。
「四季折々の唄と精進料理
の出会い」と題した布咏さん
とのコラボレーション企画
「季（とき）の会」は、四月
「桜月夜に唄う」と七月「星
逢う夜に唄う」が終わり、十月
秋と一月冬で一巡するはずだ
定刻六時、座布団に座って
待つ二十五名ほどの客の前に
布咏さんが現れ、静かにス
タートする。

日頃、ゆつくりと邦楽を聴
いたことがない皆さんに触れ
る機会を提供したいという布
咏さんの願いが叶うほど、緊
張が漂う。いつものコンサー
トで聴く曲に比べれば圧倒的
に短いのだろう、唄と三味線
が終わっても沈黙が続く。聴
衆、やがて気分もほぐれ、拍
手も出るようになるが、勢い
余って一番前に陣取った客が
DJカメラのフラッシュ光を放
つ。

一時間ほどで演奏が終わる
と、アンコールの声を掛けて
良いのやら悪いのやらと考
える間もなく、客は立たされて
食事が出されるように座布団
が敷き直される。
精進料理と聞いて予想する
量を遙かに超えるボリューム
の料理が次々と出され、歓談
しながらの食事と酒がひとわ
たり過ぎると、一人ひとりの
客に布咏さんが声をかける。

小唄や端唄の前には必ず布
咏さんの解説が入るのだが、
それを覚えていた客からの
「唄の内容が深刻だったから背
景が凄惨である」という声
が驚きでした。などという声
が聞こえる。

九時を過ぎると、全員での
記念撮影があり、お開きとな
る。春の夜も夏の夜も、傘を
さそうかどうしようかと迷う
ほどの小雨の中を歩くことに
なると。秋と冬はどういう帰
り道になるのだろうか。

「シルキー・ヴォイス」。シ
ルキーとは「絹のような手触
りや光沢のあるさま」だが、
布咏さんの声にはそれだけで
は形容し尽くせない厚みが潜
んでいる。
モンゴルの倍音を利用した
一人二重唱「ホーミー」に通
ずるものがあるのではないか
「ホーミー」を美しいと感じ
ることはないが、布咏さんの
歌声には美しさと品格を超え
た浄化力が備わっている。
邦楽に馴染みのない客の中
から布咏さんのファンを増や
すために、古典で構成した本
編の後、「ブルー」や「黒い肖
像」などを用意していた。だ
いたいのだが、昭和の名曲「悲
しい酒」なども候補に挙げて
良いだろう。

いや、あの声で黒人霊歌の
「アメージング・グレイス」
や聖歌「アベグ・マリウス」
を唄うとどうなるのだろうか。海外
の舞台も多い布咏さんが、
三味線に合わせた和の旋律を交
えてこうした曲を唄ったとき
聴衆からのスタンディング・
オベーションを浴びる様子
が目につく。

宗教歌でなく、小唄や端唄
でさえ、静かに耳を傾ければ
身と心にたまった汚れが洗い
流されるのがはつきりと分か
るからだ。
こうした体験を一度すれば、
次の「季の会」を待ち焦がれ
次の四季にも期待することに
なってしまうのだ。



